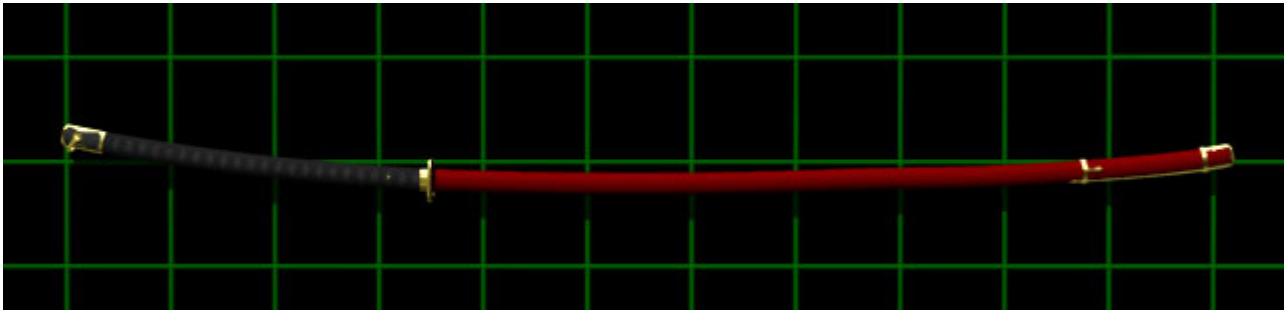
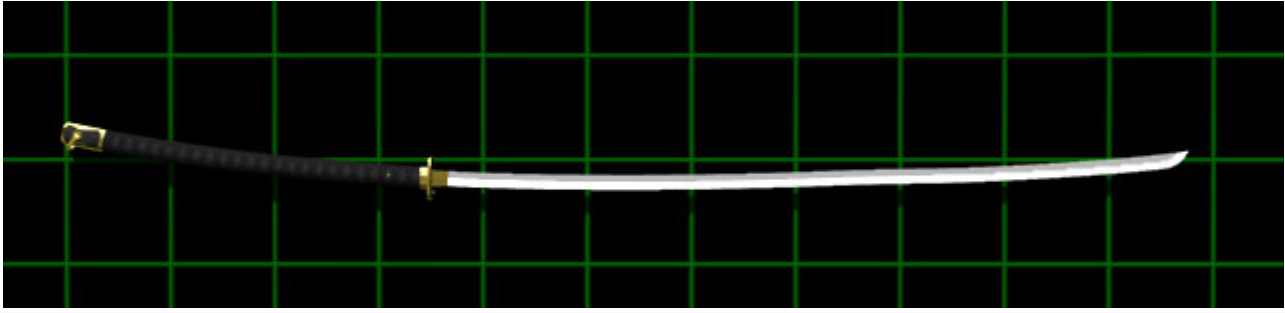


野太刀 ~Nodachi~

基本スペックと定義



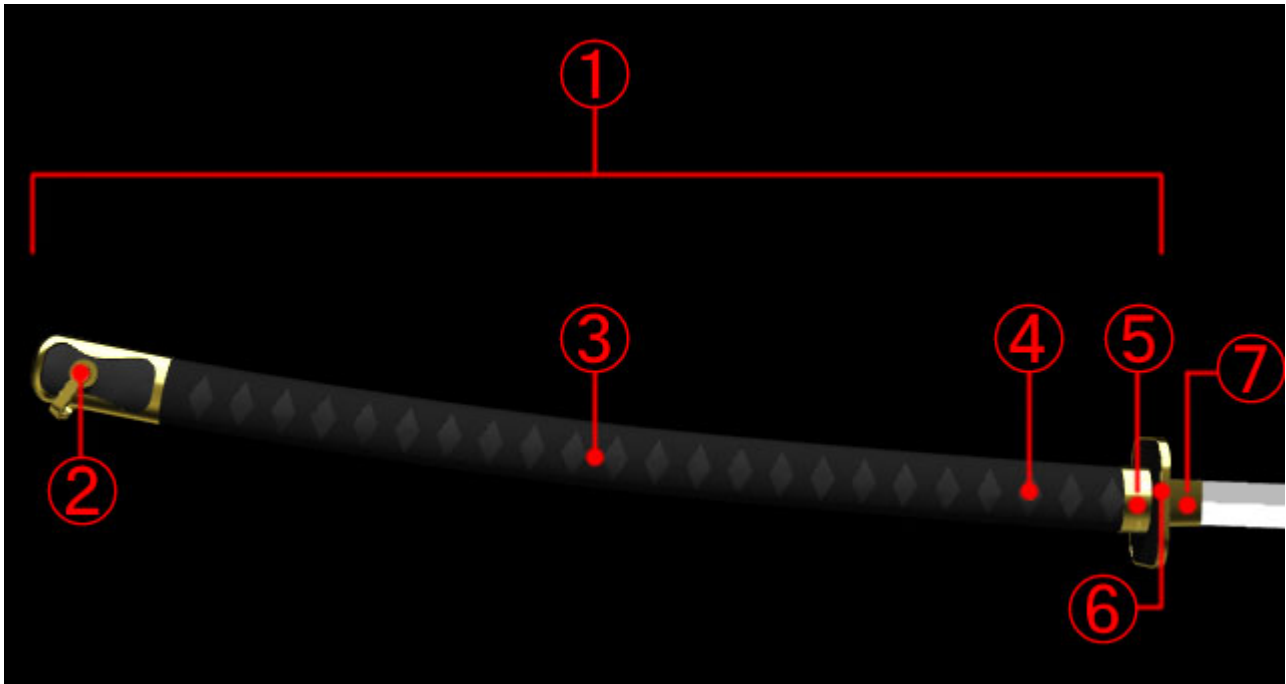
全長 120 ~ 300 cm
重量 1.5 ~ 8.0 kg
地域 日本
年代 鎌倉 ~ 安土桃山時代 (12世紀 ~ 16世紀)

野太刀もしくは大太刀とは、太刀の中でも一際長い太刀である。
西洋で言うグレートソードに当たる規格外の武器で、まともに扱えるのは力も技量もある選ばれし脳筋だけである。
現代の分類では刀身の長さが三尺（約90cm）以上のものを指すのが一般的。
ただし文献や研究者によっては野太刀の分類は5 ~ 9種類以上の分類をすることさえある。
（馬をも両断する斬馬刀などはそのいい例だろう。）
よって、一口で野太刀と言っても一定のサイズがあるわけではない。

...と書いたように、ここでの野太刀は非常に広い意味で取り扱っている。
なので長さも重量もピンキリになり、大きく差が出るのは「ちゃんと文章の読める読者」なら分かると思うが。

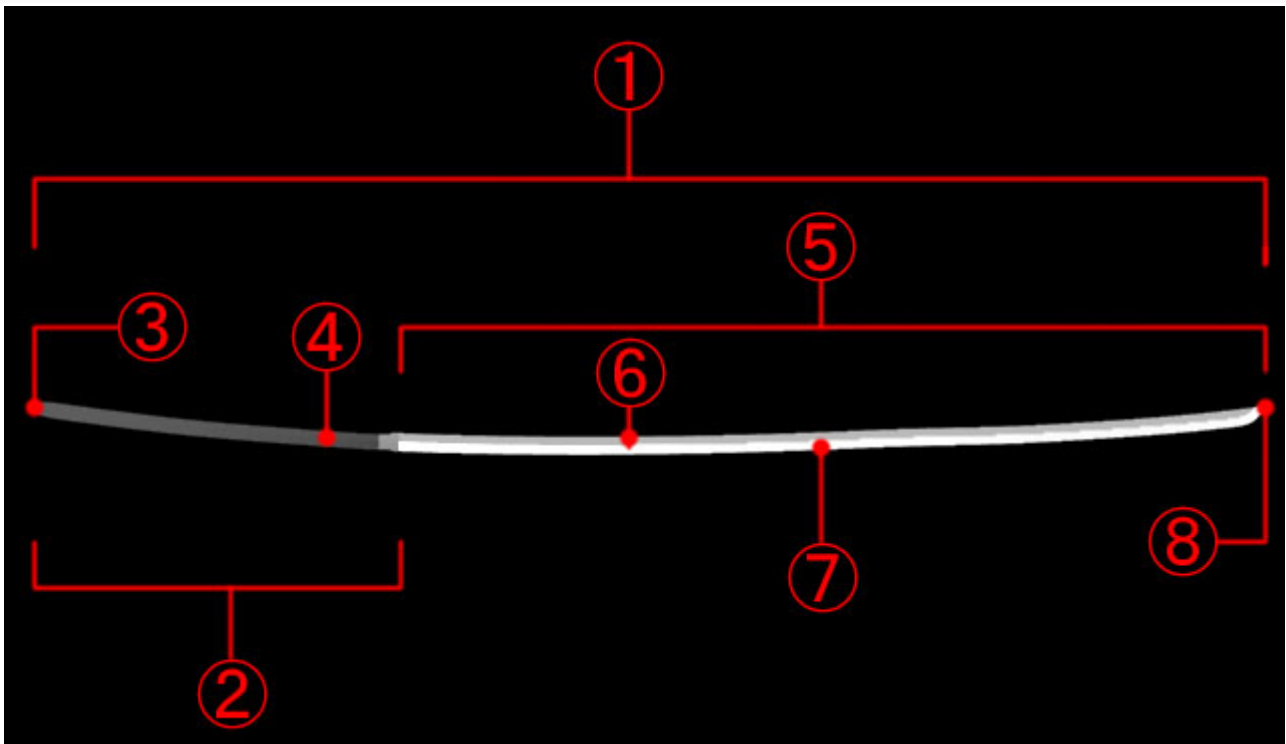
部位別の呼称

柄の部位



- 1 柄（つか）
- 2 柄頭（つかがしら）
- 3 柄巻（つかまき）
- 4 目釘（めくぎ）
- 5 縁（ふち）
- 6 鐔（つば）
- 7 はばき

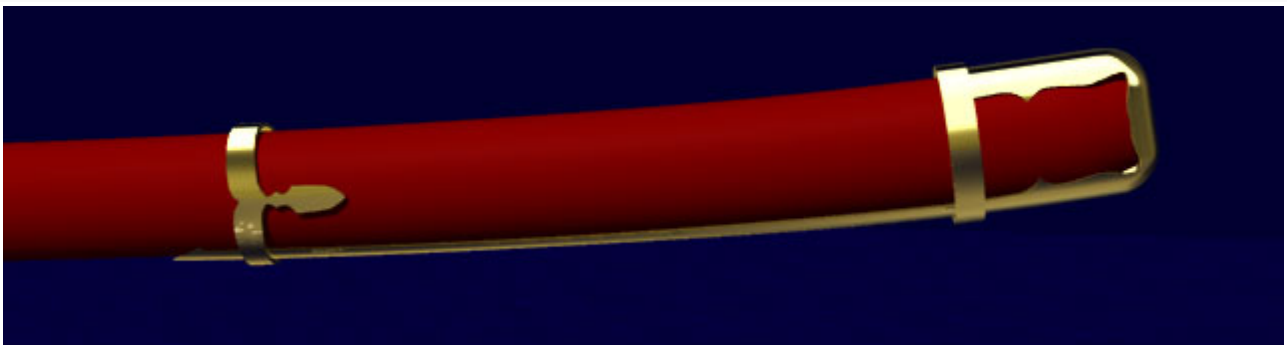
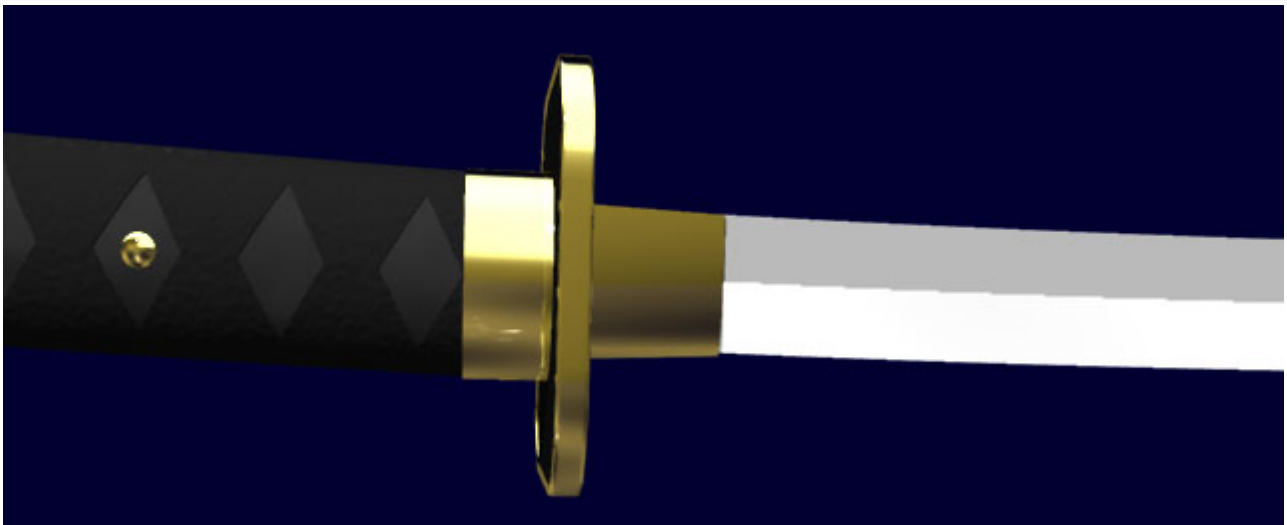
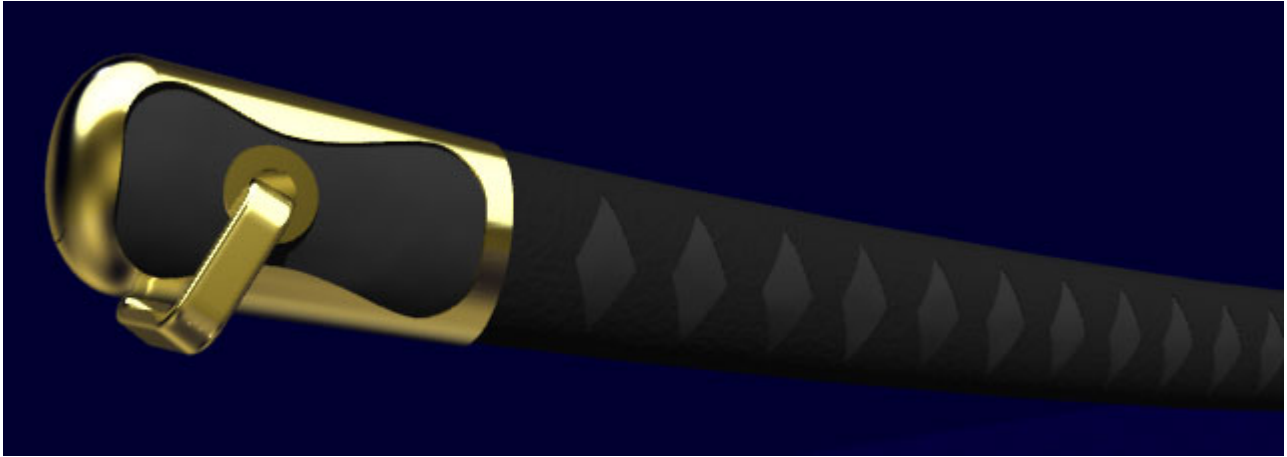
刀身の部位



- 1 刀身（とうしん）
- 2 茎（なかご）
- 3 茎尻（なかごじり）
- 4 目釘穴（めくぎあな）

- 5 刀身(とうしん)
- 6 峰(みね)
- 7 刃(は)
- 8 切先(きっさき)

時代背景



鎌倉時代...武家が権力を握る時代、武人として剛気で腕力があることが名誉とされるようになっていた。つまり超すげえ脳筋ほど名誉ある武人とされていた時代である。そんな脳筋始まった時代に、その力の誇示をするために登場したのが、一際長大な刀身の太刀である。後に日本刀の長さの刀身の長さにより分類されるようになると、「大太刀」という区分で扱われるようになった。

上記にもあるように規格外と言える大きさと重さがあるため、太刀と同じ形状の柄では扱いにくい欠点があった。この欠点を克服するために柄を長くするという改良が加えられ、「長いほうが使いやすくない？」と言うことでだんだん長くなり...大系、革紐を巻きつけた「中巻野太刀」がまず登場し、更に完全に長柄になった「長巻」が登場することとなる。

そんな脳筋黄金時代後は、もっぱら神社等の奉納用のものが製作されるようになる。ただしこれらは、あまりに大型なために部位別に作ったものを後から接合した、見た目だけのものであった。これはまともに刀として機能しない、強度的にも振ることすらできないものだったという。

また、戦国時代になるとこれらの太刀は摺り上げ（すりあげ）をして打刀にすることが多々あったため、現存する野太刀は少ない。

...と言われているのだが、どういうわけか熱田神宮には規格外サイズの野太刀が何げに10本近く残ってたりする。特大のものである長さ221.1センチの「末之青江（通称：太郎太刀、真柄太刀）」は常時入り口に展示してある。傷が多々見られるが、戦場で実際使われたリアリティが感じられる、貴重な野太刀と言える。

使用用途

一般的に刀は斬ることに優れている。

野太刀も同様に斬ることに優れており、更に刀身自体も重いため、西洋刀剣の「重さで切断する」と日本刀の「切れ味で切断する」の双方を兼ね備えている。

しかし使い方がどうしても雑ぎ払いぐらいになってしまい、汎用性に非常に欠ける。

だが、この振り回しを連続でされるほど怖いものはない気もする。

もちろん最も破壊力がある攻撃方法は「唐竹（兜割り）」だが、横に振るのにかなりの労力を要する武器を縦にまず持ち上げられるか否かが問題になる。

更に渾身の力を込めて放った唐竹が回避されたら、死亡フラグと言っていいほど隙だらけになることは必然である。

よって、唐竹はデメリットが大きすぎるためまず使うことはないだろう。

「斬馬刀」としての野太刀だと、イメージ的に唐竹で敵将を馬ごと真っ二つ！と思われがちだが、実際は違う。

回避しつつ、足を狙って馬を潰すのが主な用途である。

また、斬馬刀は元々は中国の大刀の祖になった武器のことを指し、形状は全く違うものである。

（恐らくは日本のフィクション等で野太刀や大太刀を斬馬刀と読んだことが端を発しているものと思われる。）

持ち運び方法だが、背中に背負うばかりではなく、太刀と同じように佩く（はく）ことがあったり、従者に持たせるといった運用方法だったと言われている。

選ばれし脳筋用の最強武器？！
